

「ほぼX」のヘッジ表現としての意味と役割

—カテゴリー化の観点から—

関 ソ ラ

要 旨

本研究では、「ほぼX」のヘッジ表現（ある物事があるカテゴリーのどれだけいい成員かを示す表現）としての意味と役割をカテゴリー化の観点から分析し、その特徴を明らかにする。先行研究を踏まえて事例に基づき分析した結果、「ほぼX」は、話者がXを、ある特徴において成員間に何らかの程度の差を持つ「プロトタイプ・カテゴリー」として認知する場合と、全ての成員が同じ資格で属する「必要十分条件に基づくカテゴリー」として認知する場合とで、その意味が異なることが明らかになった。前者の場合は、話者が、本来はカテゴリーXの成員ではないある対象を、Xの中心例である顕著例と似ていることから、Xの周辺例として再カテゴリー化すると考えられる。一方、後者の場合、話者は、その対象の構成要素一つ一つに注目し、それらの多くが共通して持っているある性質が、Xの成員が等しく持っている性質であることから、Xの周辺例として再カテゴリー化すると考えられる。

キーワード

ほぼ、カテゴリー化、ヘッジ表現、認知言語学、プロトタイプ・カテゴリー、必要十分条件に基づくカテゴリー

1. はじめに

現代日本語における「ほぼ」は、「物価がほぼ2倍になる」「ほぼ満点の出来」のように用いられ、「全部あるいは完全にではないが、それに近い状態であるさま」を表す副詞である（用例、意味記述共に『デジタル大辞泉』より引用）。上記の例文に基づいて考えると、これらの例文の話者は、話題の対象（「物価」など）が、「（ある基準となる物価の）2倍」や「満点」（と

いうカテゴリーの成員)ではないが、それに非常に近いと判断し、「ほぼ」を用いてそれを表現していると言える。言い換えれば、「ほぼ」は、話者が、ある物事に対して、あるカテゴリーの成員ではないが、それに近い事例であると判断する際に用いる表現であり、ある物事があるカテゴリーの成員としてどれだけいい成員であるかということを示す「ヘッジ表現 (Lakoff 1972)」の一種であると考えられる。また、「ほぼ」は、ある物事があるカテゴリー X の成員に近いことから、それを X に属する周辺的な成員(以下、周辺例)として再カテゴリー化する表現であるとも言える。しかし、「ほぼ」をヘッジ表現と見なし、カテゴリー化の観点から考察している先行研究は、管見の限り見当たらない。そこで、本研究では、現代日本語における「ほぼ」を、実例に基づいてカテゴリー化の観点から分析し、ヘッジ表現としての意味と役割を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

2. 1 カテゴリー化とヘッジ表現

まず、分析において援用する諸概念を確認する。本研究では、「カテゴリー化」の観点から「ほぼ」の意味を分析するが、「カテゴリー」と「カテゴリー化」に関しては、*初山 (2010a)* の次のような定義に従う。

このように、さまざまなモノやコトを、必要に応じて何らかの観点から整理・分類する (=まとめるべきものはまとめ、区別すべきものは区別する)ことを、「カテゴリー化(categorization)」と言います。また、カテゴリー化の結果作り出されたまとまりの1つ1つを、「カテゴリー (category)」と言います (*初山 2010a*: 18)。

さらに、*Langacker (1987: 371)* では、プロトタイプによるカテゴリー化において、プロトタイプはあるカテゴリーの典型的な事例であり、他の要素はプロトタイプと類似している程度に基づき、そのカテゴリーに位置づけられると述べられている。一方、スキーマは、それが定義するカテゴ

リーの全てのメンバーに共通する抽象的な特徴であるため、スキーマによるカテゴリ間関係は、程度の問題ではないという。これを踏まえ、初山（2010a：19-20）では、あるカテゴリの典型的なメンバー、あるいは典型的なメンバーが満たす条件・特性の集合を「プロトタイプ (prototype)」と言い、このプロトタイプに基づいて形成されたカテゴリを「プロトタイプ・カテゴリ (prototype category)」と定義している。これに対し、「必要十分条件に基づくカテゴリ」については、次のように述べている。

「4、10、58、726」などの一群の数を「偶数」と言いますが、ご存じのとおり、偶数は「2で割り切れる整数」と規定できます。この「2で割り切れる整数」という規定は、偶数の必要十分条件です。つまり、「2で割り切れる整数」という条件を満たす数であれば必ず偶数というカテゴリに属し、この条件を満たさない数は偶数ではありません。したがって、必要十分条件に基づくカテゴリは、あるものがカテゴリに属するか否かが明確であって（つまり、カテゴリの境界が明確であって）、しかも、カテゴリのメンバーは同じ資格でそのカテゴリに所属しています（初山 2010a：19）。

本研究では、この定義に基づき、「ほぼX」におけるカテゴリXを、話者が「プロトタイプ・カテゴリ」として認知する場合と、「必要十分条件に基づくカテゴリ」として認知する場合に分けて分析を行う。

次に、初山（2010b：5）では、意味を的確に記述するため、百科事典的意味観に立つ必要があると主張し、ある語（に相当する言語単位）の百科事典的意味 (encyclopedic meaning) を「その語から想起される（可能性のある）知識の総体のことである」と定義している。この記述に基づき、本研究でも百科事典的意味観の観点から分析を行い、「ほぼ」の意味を記述する。

また、初山（2014：661）では、一般性の程度（ある語の百科事典的意味を構成する要素が、その語が表す対象（カテゴリ）のどれだけの成員

に当てはまるかという程度（*舂山 2010b*）が完全ではない意味を語の百科事典的意味の一部として認めることが必要であると主張している。特に、一般性の程度が完全ではない意味を有する、あるカテゴリーの成員の一部（下位カテゴリー）に、典型例、理想例、ステレオタイプ、顕著例があるということを示しているが、その中で本研究で援用する「顕著例」に関しては次のように定義している。

- ・ 顕著例：（ある言語共同体において）あるカテゴリーの中で、そのカテゴリーの何らかの程度性のある特徴を顕著に有する一群の成員（下位カテゴリー）のこと。

例えば、「ゴールまでにはまだ距離があるから、力を振り絞ってもう一頑張りしよう（*舂山 2014 : 662*の例文4）」における「距離」は、（ある観点から見て）〈長い〉という特徴を持つものであると考えられる。しかし、「距離」ということが常に〈長い〉という特徴を持つわけではないことから、この例文における「距離」は、「距離」カテゴリーにおける顕著例であると考えられる。

これを踏まえ、本研究では、一般性の程度が完全ではない意味を有する成員でも、あるカテゴリーの中心的な成員（以下、中心例）として認識されうる（*関 2019b*）という観点から分析を行う。また、話者がある対象をカテゴリー X の中心例と比較し、カテゴリー化する際、その中心例とはどのようなものかについても考える。

先述したように、ヘッジ表現（*hedges*、垣根表現）とは、ある物事があるカテゴリーの成員としてどれだけいい成員であるかということを示す表現であり、「sort of」「kind of」「mostly」「strictly speaking」「actually」などがこのヘッジ表現に当たる（*Lakoff 1972*）。*Lakoff (1972)* は、鳥らしさには段階（*birdiness hierarchy*）があり、コマドリは最も鳥らしく、ニワトリ、ペンギン、コウモリに行くほど、鳥らしさが減ると述べ、カテゴリーには程度性があることを指摘している。すなわち、あるカテゴリーの成員

であるかどうかを判断するのは程度の問題であり、真か偽かという二分法だけでは表現することができないと言い、ヘッジ表現はこのようなカテゴリーの程度性を示す表現であると述べている。例えば、「ニワトリは一種の鳥である (A chicken is sort of a bird.)」における「一種の (sort of)」は、話題の対象の「ニワトリ」が「鳥」カテゴリーの成員として、コマドリほどいい成員ではないが、ある程度いい成員であることを表すヘッジ表現である。また、Taylor (2003: ch.4) でも、「hedges」は、カテゴリーの成員の段階性を表す言語手段であり、話者が自分の言語について何かを述べるための表現であるため、ヘッジ表現の研究により、言語そのものの本質に関する有益な情報が得られると述べている。本研究では、これらを踏まえ、「ほぼ」をヘッジ表現であると見なし、ヘッジ表現としての「ほぼ」の意味と役割に注目し、分析を進める。

2. 2 国語辞典における意味記述

本節では、国語辞典における「ほぼ」の意味記述を確認する。

『日本国語大辞典 第二版』

ほぼ【略・粗】

〔副〕全部あるいは完全にというわけではないが、それに近い状態にあることを表わす語。あらまし。おおよそ。おおかた。

『デジタル大辞泉』

ほぼ【▽略／▽粗】

〔副〕全部あるいは完全にではないが、それに近い状態であるさま。だいたい。おおよそ。「物価が一2倍になる」「一満点の出来」

『基礎日本語辞典』

ほぼ 副

状態や行為の在り方が、提示された基準ないしは完全さにかかなり近いと

ころまで達していることを表す。

〔分析〕 状況として次のものがある。

(1) 数量

「ガーデンハウスまでは歩いてほぼ一時間の行程」「木星の直径は地球のほぼ十一倍、質量は大略三百倍」「下書きはほぼ十日で完成、清書に二日はかかる」「入場者の数はほぼ三千人」

これが「ほぼ満員」となると、数量意識より、次の状態意識となる。⇒
かれこれ

(2) 状態

「円周の長さは直径の三倍にほぼ等しい」「ほぼ予想通りの結果が得られた」「東京・大阪間のほぼ真ん中に当たる地点」「十四日の月はほぼ完全な円に近い」「ほぼ満席」「『的』という中国語は、日本語の『的』にはほぼ相当する」

(3) 行為の結果

ある行為の結果や成果が、対象とする事物の全体に近い線まで達していること。⇒おおかた（「きつと」）

「相手の表情からはほぼ察しがつく」「事件のあらまきはほぼ了解した」

(4) 行為の進行状況

「仕事はほぼ片付いた」というとき、課せられた仕事の残量に視点を置けば(3)の行為の結果に近いが、行わねばならぬ仕事量の進行に視点を置けば、行為の進行状況となる。

「授業もほぼ終わりに近いころ、突然大きな地震が襲った」「二人の間がここまで進んでは、夫婦の関係もほぼおしまいと言っていい」

『日本国語大辞典 第二版』と『デジタル大辞泉』の意味記述を見ると、「全部あるいは完全に」という記述から、①数量を表す場合と、②状態を表す場合とがあることが読み取れる。『基礎日本語辞典』にも①数量を表す場合と②状態を表す場合があることが指摘されており、これに加え、③行為の結果、④行為の進行状況を表す場合もあることが記述されている。

これらの辞書における例文について検討すると、これらの先行研究における2つないしは4つの分類は、「ほぼ」と共に用いられている言葉の性質によるものであると考えられる。というのは、①数量を表す場合として挙げられている例文は全てある数値と共に用いられており、②状態を表す場合の例文も「満点」「等しい」「予想通り」「真ん中」「完全な」などの状態を表す言葉と共に用いられ、③と④もそれぞれ行為の結果や行為の進行状況を表す言葉と共に用いられているためである。また、「物価がほぼ2倍になる」「木星の直径は地球のほぼ十一倍、質量は大略三百倍」と言った例文は、数量を表すというよりは、それぞれ「2倍」「十一倍」などの状態に近いことを表すと考えられ、③行為の結果と④行為の進行状況の例文も、それぞれ「察しがつく」「了解した」「片付いた」「終わり」「おしまい」の状態に近いさまを表すため、全て状態を表す場合に含まれると思われる。『基礎日本語辞典』にも記述されているように、これらの先行研究における各々の分類は、明確に線引きできるものではないところがあると思われる。本研究では、「ほぼ」と共に用いられている言葉が表すこと（数量、状態、行為の結果、行為の進行状況）に注目した先行研究の記述とは異なり、「ほぼX」におけるカテゴリーXがどのようなカテゴリーであるかということに注目して考察を行う。というのは、次の例文(1)と(2)における「ほぼ男性」の場合、先行研究の記述だけでは、どうして各々の意味に違いが生じるかについて説明することが難しいためである（注1）。

- (1) 先日、職場の人や取引先の方と飲み会をしました。こちらは女性ばかり、取引先の方はほぼ男性というメンツでしたが、中には初めてお話しする方もいました。(YAHOO! 知恵袋、BCCWJ)
- (2) (質問) 性別変更点手続き完了後の人が 温泉の女湯や女性トイレや女子更衣室を 普通の女性は一緒に使用できますか? (省略)
(回答) 「戸籍性別変更の手続き」の事でしょうか? 非常に難しい問題ですよ。

外観的私感に依る差別はなくさなくてはなりません、実際問

題として外観が**ほぼ男性**に近い場合は女性側も恐怖や嫌悪感を覚えるとは思いますがね。(https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q13173165303?__ysp=4oCd44G744G855S35oCn44Gr6L%2BR44GE4oCd)

例文(1)と(2)の「ほぼ男性」は、先行研究の記述によると、両方とも「話題の対象の状態が男性にかなり近いところまで達していること」を表すことになるが、実際そのような意味で使われているのは(2)のみである。(1)は、取引先の方の一人一人の性別に注目し、そのほとんどが男性であることから、「ほぼ男性」という表現を使っている。この意味の違いはどこから生じるのであろうか。これは、話者が「男性」を、最も男性らしい成員が中心に位置するプロトタイプ・カテゴリーとして認知していると考えられる(2)とは違い、(1)の話者は「男性」を、全ての構成要素が同じ男性という性別を持っている必要十分条件に基づくカテゴリーとして認知していることにその原因があると考えられる。このように、Xが同じ言葉であっても、話者がそれをプロトタイプ・カテゴリーとして認知するか、必要十分条件に基づくカテゴリーとして認知するかにより、意味が異なることがあるが、このような場合は、先行研究の記述だけでは適切に説明できないと考えられる。そのため、本研究では、話者がXをどのようなカテゴリーとして認知しているかに注目し、カテゴリー化の観点から考察を行い、「ほぼX」のヘッジ表現としての意味と役割に関するより精緻な記述を試みる。

3. 「ほぼX」におけるカテゴリー化

3. 1 Xがプロトタイプ・カテゴリーとして認知される場合

まず、話者がXをプロトタイプ・カテゴリーとして認知している場合の「ほぼX」の意味と役割について考察する。次の例文(3)(4)において、「ほぼX」は話題の対象がある具体的な基準Xに近い状態であることを意味する。

- (3) 夕方、ウォーキングをしています。(十八時頃) 仕事終わりのそのままの顔で行くので、ほほ「スッピン状態」です。(YAHOO! 知恵袋、BCCWJ)
- (4) 問答師は皇后の申し出をうけたが、但し母への孝養のためであるならば、釈迦仏にすぎるものはない、とって釈迦の像を造ることになった。やがてほほ「造り終って」、最後に眉間に玉をいれることとなったが、そのとき皇后が礼拝されたところ、突然仏の眉間から光が発した。(林陸朗(著)『光明皇后』、BCCWJ)

(3) では、話者の顔の状態が「すっぴん状態」カテゴリーに近い状態であることを示し、(4) では、釈迦の像の状態が「造り終わった状態」カテゴリーに近いということを示している。また、(3) の話者は、話題の対象を「すっぴん状態」カテゴリーの成員の中でも、全く化粧していない状態、すなわち、すっぴん状態が最も際立つ成員と比較している。その結果、話題の対象はその比較基準よりは少し化粧が残っている状態であることから、それを「すっぴん状態」カテゴリーの周辺例として位置づけ、再カテゴリー化していると考えられる。(4) でも、話題の対象が比較されているのは「完全に造り終った状態」である。このようなことから、「ほほX」が、話題の対象の状態がある具体的な状態のカテゴリー X に近いことを表す場合、話題の対象と比較される基準は、そのカテゴリーの状態が最も明確に現れる顕著例((3) では「完全なすっぴん状態」、(4) では「完全に造り終った状態」) であると考えられる。なお、この場合、話者は本来カテゴリー X の成員ではない話題の対象を、X の顕著例と近い状態であるということから、最初に自分の頭の中に浮かんだ X の顕著例から成る X の下位カテゴリーをより広く拡張させ、話題の対象をより広がったカテゴリー X の周辺例としてその内部に再カテゴリー化していると考えられる。

次に、2.2節の先行研究における例文について再考する。『デジタル大辞泉』の例文である「物価がほほ「2倍」になる」「ほほ「満点」の出来」や、『基

礎日本語辞典』の数量を表す場合の例文「ガーデンハウスまでは歩いてほぼ「一時間」の行程」「木星の直径は地球のほぼ「十一倍」、質量は大略三百倍」「下書きはほぼ「十日」で完成、清書に二日はかかる」「入場者の数はほぼ「三千人」」は、数値を表す表現と共に用いられている。このような場合は、話者が、それぞれの X (四角) をカテゴリー X (成員は一つのみ) の顕著例であると認知していると考えられる。そのため、話題の対象がその顕著例(「2倍の状態」「満点の状態」「一時間がかかる状態」「十一倍の状態」「十日がかかる状態」「三千人という状態」)に近い状態であることから、それぞれのカテゴリーを、その前後の数値を含めた程度性の幅を持つプロトタイプ・カテゴリーとして拡張させ、そのような認知の下で、話題の対象をそのカテゴリーの周辺的な成員として再カテゴリー化していると考えられる。これは、次の例(5)～(7)のように、期間や位置、数字(面積)と共に用いられる場合でも同じである。

- (5) 次は、ほぼ「一か月後」の新聞記事だ。(岡庭昇(著)『メディアの現象学』、BCCWJ)
- (6) 利根川水系の多くの前方後円墳のなかで、太田天神山古墳(太田市内ヶ島)はとりわけ巨大であった。太田市の東方、渡良瀬川と利根川のあいだに展開する広大な沖積平野のほぼ「中央」に立地した、全長二百十メートルのこの超大型前方後円墳は、後円部に三段、前方部に二段の段築をもって墳丘が盛り土されている。(金井塚良一(著)『日本古代史』、BCCWJ)
- (7) そのπ形の内側、三方を黄河に包み込まれ、南は万里の長城にいたるまでの地域が、海拔千～千五百メートルのオールドス高原である。面積は十二万平方キロで、日本のほぼ「三分の一」もの広さである。(『NHK 大黄河』、BCCWJ)

(5) では、話題の対象(次の新聞記事が発行された時期)が、「一か月後という時期」に近い状態であることを、(6) では話題の対象(超大型

前方後円墳の位置)が「(沖積平野の)中央という位置」に近い状態であることを、(7)では、話題の対象(オールドス高原の面積)が「日本の三分の一」に近い状態であることを表している。ここでも、比較の対象は、「一か月後という時期」「(沖積平野の)中央という位置」「日本の三分の一」に完全に一致する顕著例であると考えられる。

- (8) デラウェア州は細長い半島の州であるが、千八百八十年の国勢調査で、州の総人口は五十九万四千人強と記録されている。日本の鳥取県(約六十二万人)とほぼ同じである。(大森実(著)『ザ・アメリカ勝者の歴史』、BCCWJ)
- (9) 千九百四十五年十二月二十七日に、モスクワ三国外相決定が発表されてはじめて、カイロ宣言の「適当な時期」の意味を知ることになり、朝鮮政界は一大混乱をへて、二つの陣営に分裂対抗するにいたった。この決定の内容は、ほぼつぎのようなものであった。三十八度線の南北に進駐した米ソ軍代表は、朝鮮民主主義臨時政府を樹立するために米ソ共同委員会を組織すること。共同委員会は臨時政府樹立のために南北朝鮮の各政党や社会団体と協議すること。(姜在彦(著)『朝鮮近代史』、BCCWJ)
- (10) ところで龍馬はいつどこで西洋人の履物である靴をはいたのだろうか。調べてみたが正確なことはわからない。ただ、長崎に行ってからのことであるのはほぼ間違いなさそうだ。(山川暁(著)『ニッポン靴物語』、BCCWJ)
- (11) 別所茶白山古墳と後述の太田天神山古墳のあいだには、あるいは未知の古墳が配置される可能性もあるが、この想定はほぼ妥当といえるだろう。(金井塚良一(著)『日本古代史』、BCCWJ)

例文(8)～(11)における「ほぼX」は、話題の対象が、比較される基準と同じである状態、または正しい状態に近いさまを表す。(8)と(9)は話題の対象である「デラウェア州の総人口」「カイロ宣言の内容」が、「日

本の鳥取県の人口と同じである状態」「次に述べる内容（の状態）」カテゴリーと近いことを表す。また、(10)と(11)では、「龍馬が靴を履いたのは長崎に行ってからのことであるの」「未知の古墳が配置される可能性もあるという想定」が、「間違いなさそうな状態」「妥当な状態」カテゴリーに近いという意味を表す。このような場合も、話題の対象と比較される基準は、「〇〇と完全に一致する状態」「最も正しい状態」であるため、カテゴリーXの顕著例であると考えられる。このタイプに当たる他の表現として、「ほぼ一致している」「ほぼ正確に」「ほぼ等しくなる」などがある(注2)。

また、「ほぼX」のXがプロトタイプ・カテゴリーとして認知される場合、下のように、話者の考えを和らげる役割を果たすことがある。

- (12) (質問) 昨日、好意を持ってる人に遊びの誘いでしたが返事がきませんこれって駄目なんでしょうか？駄目なら駄目で返事をくれたらいいのに… (省略)
 (回答) 残念ながらほぼダメだと思っていいでしょう。どういう心理かは人によって違いますが、マイナスの心理であることは確かです。(YAHOO! 知恵袋、BCCWJ)
- (13) リセールの基準は上記の方がおっしゃられてる基準でほぼ間違いないかと思います。(YAHOO! 知恵袋、BCCWJ)
- (14) ただしその手法はシルク転写というポップ手法で描かれた花・牛であり、その点に関していえば初期以来八十年代まで彼の手法は基本的に全くかわらなかった。こうした一貫性はポップ・アーティストの中でも、ほぼ彼一人であった。(日向あき子(著)『アンディ・ウォーホル』、BCCWJ)

(12)では話者が、質問者の誘いが「ダメな状態」の顕著例であると思っているにもかかわらず、それを直接言うことができずに、それに近い状態であることを表す「ほぼ」を用いて、自分の考えを和らげていると考えら

れる。同じく (13) と (14) でも、話者が話題の対象をカテゴリー X の顕著例であると思っているが、それに近い状態であると言うことで、自分の考えを和らげていると思われる。以上の考察をまとめると、次のようになる。

「ほぼX」のXがプロトタイプ・カテゴリーとして認知される場合：

話者は、話題の対象をカテゴリー X の顕著例と比較し、それに近い状態であることから、X の顕著例から成る X の下位カテゴリーから X を拡張させ、本来は X の成員ではない話題の対象を、X の周辺例として再カテゴリー化する。また、話者が、実際は話題の対象が X の顕著例であると考えていてもそう言うことができず、X の顕著例と近い状態であると言うことで、自分の考えを和らげる役割もある。

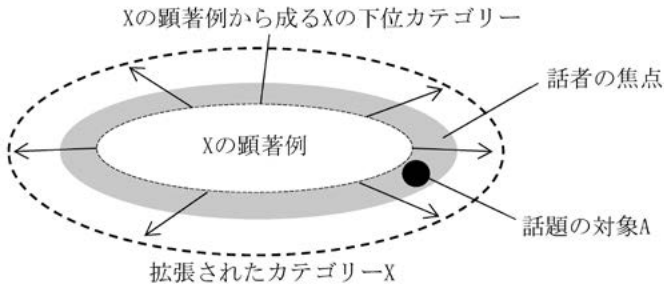


図 1

3. 2 カテゴリー X が必要十分条件に基づくカテゴリーとして認知される場合

次に、カテゴリー X が必要十分条件に基づくカテゴリーとして認知される場合を見る。

- (15) 先日、職場の人や取引先の方と飲み会をしました。こちらは女性ばかり、取引先の方はほぼ男性というメンツでしたが、中には

初めてお話しする方もいました。((1)を再掲)

- (16) **ほほ**[鳥]のみの店。その鳥が柔らかく絶品の美味しさ! (<https://retty.me/area/PRE23/ARE64/SUB6403/100000027119/48748808/>)
- (17) それは20代から30代の男女が集まる、婚活パーティでのこと。パッと見る限り、**男性**は**ほほ**[30代]、女性は20代と30代が半々ぐらい集まっている印象。(<https://ananweb.jp/anew/323548/>)

(15) では、話者は「取引先の方の構成員一人一人」に注目し、その人たちのほとんどが男性であることから、「取引先の方(の構成員一人一人)」を「男性」カテゴリーの周辺例として位置づけている。ここで、カテゴリーXである「男性」カテゴリーは、すでに2.2節で述べたように、最も男性らしいプロトタイプを中心とし、周辺に行くほど男性らしさの程度に違いが見られるプロトタイプ・カテゴリーではなく、その成員が全て同じ資格(男性という性別を持つ)でそのカテゴリーに帰属している必要十分条件に基づくカテゴリーとして認知されている。(16)の話者は、話題の対象である店のメニュー一つ一つに注目し、その中に鳥料理が多いことから、「鳥(料理)」カテゴリーの周辺例であると考えている。ここでも、「鳥(料理)」カテゴリーの成員は全て同じく「材料が鳥である料理」であり、必要十分条件に基づくカテゴリーとして認知されていることがわかる。(17)では、婚活パーティに参加した男性の一人一人の歳に注目し、そのほとんどが「30代」カテゴリーの成員であることから、「30代」カテゴリーの周辺例として位置づける。この場合も同じく、Xは全て年齢が30代であり、構成要素の間により30代らしい30代というような程度の差のない必要十分条件に基づくカテゴリーであると言える。このように、話者がカテゴリーXをプロトタイプ・カテゴリーと必要十分条件に基づくカテゴリーのどちらのカテゴリーとして認知するかにより、「ほほX」は2つのタイプに分類できると考えられる。また、このような場合は、話者が話題の対象の構成要素一つ一つに注目し、それらの多くが共通して持っているある性質が、必要十分条件に基づくカテゴリーであるXの成員が等しく持っている

る性質であることに基づき、話題の対象をカテゴリーXの周辺例として再カテゴリー化していると言うことができる。また、この場合、「ほぼX」には、話題の対象の構成要素に、Xに属する成員の数が多いいことを表す役割もあると考えられる。

しかし、これらのカテゴリーが常に必要十分条件に基づくカテゴリーとして我々に認知されるわけではない。

- (18) (質問) 性別変更点手続き完了後の人が 温泉の女湯や女性トイレや女子更衣室を 普通の女性は一緒に使用できますか? (省略)
(回答) 「戸籍性別変更の手続き」の事でしょうか? 非常に難しい問題ですよ。

外観的私感に依る差別はなくさなくてはなりません、実際問題として外観が**ほぼ男性**に近い場合は女性側も恐怖や嫌悪感を覚えるとは思いますが。(2)を再掲)

- (19) 私(女性)は、**ほぼ30代**(29歳10か月)で納涼法人に転職しました。(https://sodaterublog.com/4285.html)

(18)において、話者はある人の外観が「男性」カテゴリーの顕著例(最も男性らしい男性)に近い状態であるさまを「ほぼ男性」という言葉で表している。一方、「30代」カテゴリーの構成要素である30歳、31歳、32歳…の中には、「最も30代らしい30代」の年齢は存在せず、「30代」カテゴリーは常に必要十分条件に基づくカテゴリーであると考えられる。しかし、例(19)を見ると、話者は「30代」カテゴリーの成員一人一人が共通して持っている性質に注目しているのではなく、「30代」カテゴリーを一つのまとまった全体としてのカテゴリーとして認知し、その境界線である30歳に近い「29歳10か月」は、20代のほかの成員よりは30代に近いので、話者は自分の年齢を「30代」カテゴリーの周辺例であると考えている。したがって、Xがどのようなタイプのカテゴリーであるかに加え、話者が話題の対象とカテゴリーXを、その構成要素一つ一つに注目し、複数の構成要素から

成る集合体として認知するか、それとも一つのまとまった全体として認知するかという点（注3）も、「ほぼX」の2つのタイプを分ける基準となると言える。

3.2節の分析をまとめると、以下のようにまとめられる。

「ほぼX」のXが必要十分条件に基づくカテゴリーとして認知され、話者が話題の対象とXの構成要素に注目している場合：

話者は、その対象の構成要素一つ一つに注目し、それらの多くが共通して持っているある性質が、Xの成員が等しく持っている性質であることから、Xの周辺例として再カテゴリー化する。また、話題の対象の構成要素に、Xに属する成員の数が多いことを表す役割もある。

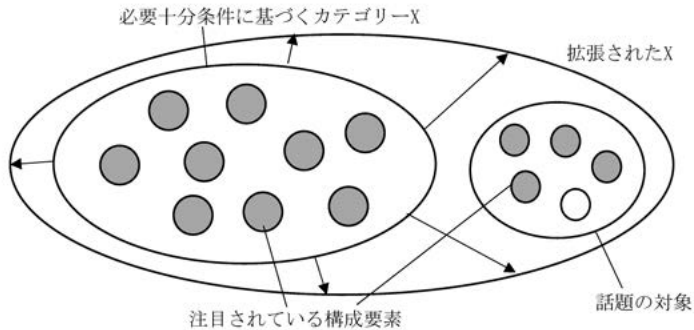


図2

4. 関（2019a）における「ぎりぎりX（である）」との比較

関（2019a）では、「ぎりぎりX（である）」をヘッジ表現の一種としてカテゴリー化の観点から分析しており、本研究の分析対象である「ほぼX」と同じく、Xがプロトタイプ・カテゴリーである場合と、必要十分条件に基づくカテゴリーである場合とでカテゴリー化の様相が異なることを指摘している。

- (20) 前回、「ドラム缶じゃない、ギリギリ人間だ。」を書かせていただいてました。覚えてくださってる方いらっしゃるかしら。前回、ドラム缶体型を抜け出すべく、70kg から62kg まで痩せましたがストレスで過食を繰り返し現在69kg…（関 2019a：20の例（3a））
- (21) 私は色々調べて、コスメデ〇ルテが、あってました。（中略）おかげで、ギリギリ30代（38か、39？笑）に見えるって言われるようになってきました。（関 2019a：23の例（4））
- (22) 親は20代か、ぎりぎり30代ぐらいだったことになります。それでマイホーム購入となりましたが、私が年中の時に転勤になりました。（関 2019a：30の例（18））

例（20）では、X「人間」カテゴリーが、理想的な人間の体型を持った成員（理想例）がプロトタイプであるプロトタイプ・カテゴリーであり、「ギリギリ人間だ」という表現では、話題の対象がその「人間」カテゴリーの理想例と異なることから、話者が理想例から成る「人間」の下位カテゴリーをより広く拡張させ、話題の対象を「人間」カテゴリーの周辺例として位置づけている。一方、（21）と（22）では、Xが必要十分条件に基づくカテゴリーである「30代」カテゴリーで、話題の対象はその「30代」の境界に近いことから、「30代」カテゴリーの周辺例としてカテゴリー化していると述べられている。

このような点から、両語は共通点があると考えられるが、（20）の「ギリギリ人間だ」を「ほぼ人間だ」に置き換えることができず、例（3）「夕方、ウォーキングをしています。（十八時頃）仕事終わりのそのままの顔で行くので、ほぼスッピン状態です。」の「ほぼスッピン状態です」も「ぎりぎりスッピン状態です」に置き換えることができないことから、両語には何らかの違いがあると考えられる。また、話題の対象が30歳に近い29歳の場合は、（19）の「ほぼ30代」のように「ほぼX」も用いることができ、（22）の「ぎりぎり30代」のように「ぎりぎりX（である）」も用いることができるが、話題の対象が39歳の場合は、（21）の「ギリギリ30代」のよ

うに「ぎりぎり X (である)」は用いられるが、「ほぼ X」は用いることができないため、このような点においても違いが見られる。

まず、例 (20) において、「ぎりぎり」を「ほぼ」に置き換えることができないのは、「ほぼ X」の話題の対象が、話者によって X の周辺例として再カテゴリー化される前に、本来 X の成員ではないという前提がなければならぬためであると思われる。(23) を見ると、「ほぼ人間」という表現が言えるのは、話題の対象が本来「人間」ではなく「ロボット」である場合であることが分かる。

- (23) ほぼ人間! ロボットによる衝撃の「ダンス動画」(<https://tabilabo.com/298692/wt-boston-dynamics-dance-2021>)

また、(23) でロボットと比較されるのは、「人間」カテゴリーの成員の中でも、ダンスが上手な人間、すなわち顕著例(注4)であると考えられるが、関(2019a)によると、「ぎりぎり X (である)」の場合は、X のプロトタイプには、顕著例だけでなく、典型的な成員(典型例)やステレオタイプも存在することが明らかになっているため、これも違いとして挙げられる。さらに、例(3)「夕方、ウォーキングをしています。(十八時頃)仕事終わりのそのままの顔で行くので、ほぼスッピン状態です。」の「ほぼスッピン状態です」を「ぎりぎりスッピン状態です」に置き換えることができないのも、「ほぼすっぴん」は本来すっぴんではない、化粧している状態を表し、「ぎりぎりすっぴん」は例(24)のように、すっぴんである状態を表すためであると考えられる。

- (24) アレルギー持ちのため化粧はほとんどできません。子供用の日焼け止めは大丈夫なので、ぎりぎりすっぴんではありませんが、不幸中の幸いと思う私はかなりズボラなのでございましょう…。
(<https://komachi.yomiuri.co.jp/topics/id/716877/all/>)

次に、Xが必要十分条件に基づくカテゴリーである場合、29歳は「ぎりぎり30代」でも「ほぼ30代」でも表すことができるのに対し、39歳を表す際は「ぎりぎり30代」だけが用いられる理由も、一つ目に「ほぼX」の話題の対象は本来Xの成員ではないという前提を持つことがあげられる。また、二つ目に、「ぎりぎりX（である）」は、必要十分条件に基づくカテゴリーの境界線に近い部分にのみ話者の焦点が置かれ、話題の対象がその境界線に近いという条件さえ満たされれば用いることができるが、「ほぼX」は、話題の対象の数値がある基準より小さい場合にのみ用いられるためであると考えられる（注5）。

最後に、「ぎりぎりX（である）」は例（17）「それは20代から30代の男女が集まる、婚活パーティでのこと。パッと見る限り、男性はほぼ30代、女性は20代と30代が半々ぐらい集まっている印象。」のように、話者が話題の対象とカテゴリーXの構成要素一つ一つに注目している場合は、用いることができない点も、相違点の一つである。

本節の分析を以下にまとめる。

「ほぼX」と「ぎりぎりX（である）」の共通点：

- ① 同じくカテゴリーの周辺例を明示するヘッジ表現である。
- ② 話者が、話題の対象をカテゴリーXのプロトタイプと比較し、Xのプロトタイプから成る下位カテゴリーを拡張させ、話題の対象をXの周辺例としてカテゴリー化する表現である。
- ③ Xがプロトタイプ・カテゴリーである場合と、必要十分条件に基づくカテゴリーである場合の両方とも用いることができ、それぞれの場合におけるカテゴリー化の様相が異なる。

「ほぼX」と「ぎりぎりX（である）」の相違点：

- ① 「ほぼX」の話題の対象は、本来カテゴリーXの成員ではないという前提を持つが、「ぎりぎりX（である）」の話題の対象にはそのような前提がない。

- ② 「ほぼX」において、話題の対象と比べられるXのプロトタイプは、顕著例のみであるが、「ぎりぎりX(である)」の場合は、顕著例だけでなく、典型例、ステレオタイプも話題の対象と比較される。
- ③ 「ぎりぎりX(である)」の話者は、必要十分条件に基づくカテゴリーの境界線に近い部分にのみ注目し、話題の対象がその境界線に近いという条件さえ満たされれば用いることができるが、「ほぼX」は、話題の対象の数値がある基準より小さい場合にのみ用いられる。
- ④ 話者が話題の対象及びカテゴリーXの構成要素一つ一つに注目している場合は、「ほぼX」のみ用いることができ、「ぎりぎりX(である)」にはそのような用法がない。

5. おわりに

本研究では、「ほぼX」のヘッジ表現としての意味と役割を、カテゴリー化の観点から分析し、その特徴を明らかにした。まず、「ほぼX」は、話者が、話題の対象をカテゴリーXの周辺例として再カテゴリー化し、他のXの成員とは何らかの程度の違いがあることを表すヘッジ表現である。また、「ほぼX」は、話者がカテゴリーXをプロトタイプ・カテゴリーと必要十分条件に基づくカテゴリーのどちらとして認知するかにより、その意味と役割に以下のような違いが見られる。

「ほぼX」のXがプロトタイプ・カテゴリーとして認知され、話者が話題の対象とXを一つのまとまりとして認知する場合：

話者は、話題の対象をカテゴリーXの顕著例と比較して、それに近い状態であることから、Xの顕著例から成るXの下位カテゴリーからXを拡張させ、本来はXの成員ではない話題の対象を、Xの周辺例として再カテゴリー化する。また、話者が、実際は話題の対象がXの顕著例であると考えていてもそう言うことができず、Xの顕著例に近い状態であると言うことで、自分の考えを和らげる役割もある。

「ほぼX」のXが必要十分条件に基づくカテゴリーとして認知され、話者が話題の対象とXの構成要素に注目している場合：

話者は、その対象の構成要素一つ一つに注目し、それらの多くが共通して持っているある性質が、Xの成員が等しく持っている性質であることから、Xの周辺例として再カテゴリー化する。また、話題の対象の構成要素に、Xに属する成員の数が多いいことを表す役割もある。

最後に、「ほぼX」と多くの共通点を持つヘッジ表現「ぎりぎりX(である)」との比較を通して、「ほぼX」には、話題の対象が本来Xの成員ではないという前提があるということが分かった。

今後の課題として、「ぎりぎりX(である)」以外の「カテゴリーの周辺例を明示するヘッジ表現」(特に、カテゴリーXの拡張が見られる表現)との比較分析を通して、「ほぼX」の特徴をより明確にし、「カテゴリーの周辺例を明示するヘッジ表現」全体における「ほぼX」の位置づけについて考察したいと考える。

注

- 1) 例文中の下線、ゴシック体、四角は全て筆者が施したものである。下線は例文における話題の対象を、四角は話題の対象がカテゴリー化されるカテゴリーXを示している。また、分析対象である「ほぼ」は太いゴシック体で示した。
- 2) X(の顕著例)が同じであるさま、一致するさまを表す場合は、カテゴリーXの成員は「同じであるさま」「一致するさま」の一つだけであると考えられるが、話者はそのカテゴリーを、「完全に同じではなくてもある程度似ているさま」まで含めた、程度性に幅を持つカテゴリーとして拡張させ、そのような認知の下で話題の対象を再カテゴリー化していると考えられる。
- 3) 同じ物事を複数の構成要素から成る集合体として認識することもでき、一つのまとまった全体として認識することもできるという点は、山梨(1995)における「統合的スキーマ」と「離散的スキーマ」という概念で説明できる。山梨(1995)では、我々が同一の物事を全体として認識することも、個々のメンバーとして

認識することもできることを指摘し、前者を「統合的スキーマ」、後者を「離散的スキーマ」と称している。また、Langacker (2008) でも、同じ名詞が一つの個別的なものとして認識され、可算名詞 (count noun) として使われることもでき、それらが集まった全体として認識され、質量名詞 (mass noun) として使われることもできることを指摘している。

- 4) 「ダンスが上手だ」ということは、肯定的な評価を含んでいるため、理想的な成員である理想例として考えることもできるが、初山 (2014:666) には、「理想例」は、程度性のある特徴に注目している場合は、「顕著例」の特殊な一種と考えられる。」ということが指摘されている。これを踏まえ、本研究では、「ほぼX」のXがプロトタイプ・カテゴリーである場合、話題の対象と比較されるXの中心例は、顕著例であると考ええる。
- 5) ただし、関 (2019a: 30-31) では、「ぎりぎり30代」の場合、30歳よりは29歳や39歳を指すことが多いと述べ、その理由として、カテゴリーXが方向性や評価性を持つ場合、その方向性が向かう方や望ましくない方がカテゴリーの境界に近い周辺として認識されやすい点を挙げている。年齢カテゴリーは上がって行く一方である方向性を持ち、かつ若いほど望ましいという評価性をもっているため、29歳や39歳を指すことが多い (関 2019a: 31)。

参考文献

- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2001) 『日本国語大辞典 第二版』、小学館
- 松村明監修『デジタル大辞泉』、小学館 (「コトバンク」 (<https://kotobank.jp/>))
- 関ソラ (2019a) 『現代日本語におけるカテゴリーの周辺例を明示する表現に関する考察』、名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文
- 関ソラ (2019b) 「発話におけるカテゴリーの中心例に関する一考察：カテゴリーの周辺例を明示する表現を通して」『日本認知言語学会論文集』第19巻、pp.197-209、日本認知言語学会
- 初山洋介 (2010a) 『認知言語学入門』、研究社
- 初山洋介 (2010b) 「百科事典的意味観」、山梨正明他編『認知言語学論考』No.9、pp.1-37、ひつじ書房
- 初山洋介 (2014) 「百科事典の意味における一般性が不完全な意味の重要性」、『日本認知言語学会論文集』第14巻、pp.661-666、日本認知言語学会

山梨正明 (1995) 『認知文法論』、ひつじ書房

Lakoff, G. (1972) "Hedges: A Study in Meaning Criteria and the Logic of Fuzzy Concepts." *CLS* 8, pp.183–228, Chicago Linguistic Society.

Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar Vol. 1*, Stanford: Stanford University Press.

Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, New York: Oxford University Press.

Taylor, J. R. (2003) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory (Third Edition)*, New York: Oxford University Press. (辻幸夫他訳 (2008) 『認知言語学のための14章』、東京、紀伊国屋書店)

例文の出典

日本国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』 (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)

Yahoo! JAPAN (<http://www.yahoo.co.jp>)

